**降誕節第４主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年1月19日**

**「小さな勇者」**

**ヨシュア記2章1～7節**

**2:1 ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。**

**2:2 ところが、エリコの王に、「今夜、イスラエルの何者かがこの辺りを探るために忍び込んで来ました」と告げる者があったので、**

**2:3 王は人を遣わしてラハブに命じた。「お前のところに来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。彼らはこの辺りを探りに来たのだ。」**

**2:4 女は、急いで二人をかくまい、こう答えた。「確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。**

**2:5 日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」**

**2:6 彼女は二人を屋上に連れて行き、そこに積んであった亜麻の束の中に隠していたが、**

**2:7 追っ手は二人を求めてヨルダン川に通じる道を渡し場まで行った。城門は、追っ手が出て行くとすぐに閉じられた。**

**使徒言行録23章12～22節**

**23:12 夜が明けると、ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。**

**23:13 このたくらみに加わった者は、四十人以上もいた。**

**23:14 彼らは、祭司長たちや長老たちのところへ行って、こう言った。「わたしたちは、パウロを殺すまでは何も食べないと、固く誓いました。**

**23:15 ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるという口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」**

**23:16 しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。**

**23:17 それで、パウロは百人隊長の一人を呼んで言った。「この若者を千人隊長のところへ連れて行ってください。何か知らせることがあるそうです。」**

**23:18 そこで百人隊長は、若者を千人隊長のもとに連れて行き、こう言った。「囚人パウロがわたしを呼んで、この若者をこちらに連れて来るようにと頼みました。何か話したいことがあるそうです。」**

**23:19 千人隊長は、若者の手を取って人のいない所へ行き、「知らせたいこととは何か」と尋ねた。**

**23:20 若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるという口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。**

**23:21 どうか、彼らの言いなりにならないでください。彼らのうち四十人以上が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い、陰謀をたくらんでいるのです。そして、今その手はずを整えて、御承諾を待っているのです。」**

**23:22 そこで千人隊長は、「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、若者を帰した。**



**「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」（23：11）**

**先々週の礼拝で共に聞きました御言葉の最後の部分です。パウロは同胞であるユダヤ人たちから律法を軽んじ神を冒涜し聖なる神殿を汚したと言いがかりをつけられて殺されそうになりました。夜一人兵営の中で過ごすパウロにとってイエス様が現われてくださり、そばに立って肩に手を置いてこの言葉を掛けて下さったのがどんなに勇気づけられたかと思います。エルサレムで十分な働きができなかったと思っていたのが、「エルサレムでよく頑張ったローマでも頑張れ」とばかりに、イエス様はパウロを励まして下さるのです。それは、ローマへの道はイエス様が約束して下さっているのです。暗くて先の見えないトンネルのような道であっても、はるかかなたにあるローマに通じる一本の道をイエス様は約束して下さり、その道をパウロと共に歩んで下さる、その力強い約束をパウロに与えてくださったのです。**

**私はこの説教の準備をする中で改めてパウロのローマへの旅の地図を見ました。聖書の巻末に地図がありますのでまた後で見ていただければと思いますが、その道は困難を極めました。そもそもパウロは今囚人という立場です。今までのように自由に伝道の旅をすることができません。囚人という自分ではいかんともしがたい立場の中で、あっちに連れられ、こっちに連れられ、途中で足止めを食うこともありました。パウロが乗った船が暴風に襲われて難破したこともありました。それでも「ローマでも証しをしなければならない。」このイエス様の約束通りにローマにたどり着き、ローマでイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝え力強く証しをするのです。もちろんそれはパウロのスタンドプレーではありません。諸教会の兄弟姉妹の祈りと支えがあります。聖書には名前が記されていない、名もなきキリスト者の祈りと支えによってパウロの伝道は進められていくのです。そして、そこにはもちろん神様の導きがあります。人の思いをはるかに超えた神様の導きによって伝道は進み、福音がエルサレムから周辺の国々へ、ローマへ、さらには地の果てに至るまで福音が広がっていくのです。**

**そんなパウロを亡き者にしようとユダヤ人たちが動きました。12節には「ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。」と記されています。「誓いを立てた」という言葉は元の言葉を直訳すると「彼ら自身を呪いをかけて誓った」となります。これはもし約束を守れなかったら神様から呪われることを条件に誓いを立てるということです。神様から呪われる、極端に言えば「もしパウロを殺せなかったら神様どうか私たちの命を取ってください」と、命を懸けた誓いを立てたのです。その数は40人以上。ただならぬ雰囲気で決起集会が行われていることが私たちも想像できます。そして彼らは祭司長たちや律法学者たちを巻き込んでこの陰謀が成功するように手はずを整えたのです。**

**彼らの計画は万全だと思われました。しかし、彼らの陰謀をパウロの姉妹の子がどういう方法でかはわかりませんが耳にしたのです。そして、その陰謀をパウロのいる兵営に行ってパウロに伝えたのです。パウロの姉妹の子、恐らくはエルサレムに住んでいるパウロの姉の子だと考えられています。つまりパウロからすると甥です。彼は「若者」と記されていますので恐らくは10代だったのではないかと考えられています。**

**そんな若者であるパウロの甥が叔父であるパウロの命の危機に際してパウロを助けたのです。パウロは100人隊長に言い、100人隊長は千人隊長にパウロの甥を通して直接話ができるように取り計りました。パウロの甥は千人隊長に自らが聞いた陰謀を密告したのです。「どうか彼らの言いなりにならないでください」千人隊長にお願いするパウロの甥の懸命な姿が目に浮かびます。その密告を聞いた千人隊長は「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、パウロの甥を帰しました。千人隊長は見ず知らずの若造の言うことなど聞く耳もたないという態度では決してなく、真剣に向き合ったのです。続く23節からはパウロの甥の密告に従って千人隊長がパウロの命を守るために大勢の護衛をつけてカイサリアに送ったことが記されています。**



**なんとも劇的なまるでスパイ映画でも見ているような場面です。それにしても思いますのはこのパウロの甥の勇気ある行動です。「勇気を出せ」パウロへのイエス様のお言葉にパウロより先にパウロの甥が聞き従うかのように勇気を出してパウロのもとに行ったのです。鎧や兜や剣などで武装した兵士が大勢いるローマの軍隊です。その中にある兵営にどうやって入り込んだのか不思議ですが、パウロの親戚ということで差し入れを持ってきたと会わせてもらったのかもしれません。それでも足がすくみそうなところにまだ10代の若者が足を踏み入れるのです。パウロだけならまだしも千人隊長という軍隊のトップに物おじせずに直訴するのですから、その勇気がいかにすごいものかと思います。**

**彼を動かしたのは一体何でしょうか。そこにはもちろん叔父という肉親の命が狙われているから助け出さないとという人としての使命感があるでしょう。でも私はそれだけではないと思います。彼の行動は下手をすれば自分の命が危なくなる行動です。軍隊に入り込んでパウロや100人隊長の導きがあると言え、軍隊のトップと直接話をするのですから、軍隊から殺されてしまっても不思議ではないでしょう。そして、千人隊長に密告したことがもしユダヤ人たちにばれてしまったら、彼の命はないでしょう。それでも自らの命も顧みずに行動を起こしたのは、叔父を助けたい使命感と共に神様の前に真実に生きようとする思いが彼にあったのではないかと思うのです。ユダヤ人たちの陰謀を聞いて、叔父は助けたいけれど面倒なことに巻き込まれたくないと思って何も行動を起こさないこともできたでしょう。自分の身の可愛さに聞かなかったふりをすることもできたはずです。しかし、彼は勇気を出して動いたのです。それこそが神様の前に真実に生きることであり神様の御心に適うことだと信じて行動を起こしたのだと思うのです。その結果、10代の若者の小さな勇者の行動により、パウロは殺害されることなく、思いがけない形でカイサリアに向かい、さらにはローマに進む道が開かれたのです。そしてそこには神様の導きがあり、神様が働いて下さっているのです。**

**私たちは使徒言行録を読み進めていますが、今日の個所と同じようにパウロや使徒たちが思いがけない形で助けられたという箇所はいくつかあります。その一つが9：23～25です。**

**「9:23 かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、**

**9:24 この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。**

**9:25 そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。」**

**ここではパウロがまだサウロと呼ばれていた頃、イエス様と出会って回心したばかりのダマスコで福音を告げ知らせていた頃、パウロの命を狙うユダヤ人たちからパウロの弟子たちがパウロを助け出したことが記されています。サウロの弟子たち、具体的に彼らの名前が何だったのかは聖書に記されていませんのでわかりません。今日の聖書箇所のパウロの甥も「パウロの姉妹の子」とだけ記されているだけで名前はわかりません。彼らはその名前は伝えられていませんが、彼らの神様の前に真実に生きようとする勇気ある行動があったからこそパウロの命は守られて、教会の伝道の業は進んでいったのです。名もなき小さな勇者の働きで伝道の業が、神様の救いの業が進められていったのです。**

**聖書にはそのような名もなき小さな勇者の働きがたくさん記されています。本日の旧約聖書に出てくるラハブという女性も彼女は名前は記されていますが、名もなき小さな勇者と言っていいと思います。彼女は自分が住む町に偵察に来たイスラエル人2人をかくまいました。彼女の行動もまた勇気を出した命がけの行動です。今日の個所の少し後に記されていますが、「主がこの土地をあなたたちにあたえられた」（9節）と彼女は信じていますし、何より彼女は「あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられる」（11節）と信仰の告白をしているのです。彼女は異邦人でありながら主なる神様こそが神であると信じるからこそ、神様の前に真実に生きることであり神様の御心に適うことだと信じて勇気を出して行動を起こしたからこそ、神様の救いの御業が進んでいったのです。**

**私たち諏訪教会は今年教会創立115周年を迎えます。その歩みの中で124名の方が神様の御元に召されました。召天者名簿を見ていますと、私はもちろん最近天に召された方しか存じ上げないのですが、教会の創立期の頃、明治とか大正とか昭和の初めとかに召された方々は今教会に連なっている方でもお名前は知っているけどどのような方かはわからないという方が多いのではないかと思います。もちろん中には大きな働きをされて教会の記録にも記憶にも残るような方もおられるでしょう。けれども多くの方は記憶からは消えてしまっても、この地上での歩みをされている時は何よりも毎週の礼拝を大切に守られて、神様の前に真実に生きて、神様の御心に適うことを祈り求めて歩まれた、その様な信仰の歩みをこつこつとされたのです。イエス様の十字架と復活の福音を喜びを持って勇気を出して宣べ伝え、証しをする働きをこつこつとされたのです。**

**また、時代によっては例えば戦時下にあっては教会に行って礼拝を守る、今私たちが当たり前のように行っている教会に行って礼拝に行くということがどんなに勇気のいることであったかを思うのです。教会に行って神様を礼拝する、それが命がけの勇気のいる行為であったかを思います。それでも、毎週の礼拝を大切にして、御言葉に聴き祈り宣べ伝えることを大切にして、一人の小さなキリスト者として小さな勇者として歩んでいかれたのです。**

**私たちも小さなキリスト者であり小さな勇者なのです。そして教会というのは名もなき小さなキリスト者であり小さな勇者の集まりであるということができるのです。イエス様の十字架と復活によって愛されて罪赦されて救われた私たちは神様の前に真実に生きて、神様の御心に適うことを祈り求めてこつこつと歩んでいくことが大切なことなのです。神様はそのような私たちの歩みを救いの御業のために豊かに用いて下さるのです。**